



広島女学院同窓会 東京支部ニュース

編集・発行 東京支部役員会

2009. 10. 25

第 51 号

今年度の聖句

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、
見えないものは永遠に存続するからです。 (コリントの信徒への手紙二 4章18節)

世界天文年

元院長 西 恵三

8月6日、テレビ放送で広島の平和祈念式典を眺めながら、私が院長在任中に女学院で行われる平和祈念式で「追悼のことば」を担当したことを思い出しました。同時に関東ブロック主催の「夏雲の集い」にも参加してきましたが、今年も7月10日に日本アライアンス教団東京キリスト教会での集いに出席し、女学院との交わりを新たにすることができて感謝しています。

今年はガリレオ・ガリレイが、発明されて間もない望遠鏡を初めて天体観測に使用して400年が経過したことを記念して「世界天文年」が計画実行中で、天文学に関係している方々が多忙に動き回り、私の如き老兵も急に駆り出されています。特に7月22日に皆既日食帯が日本列島の南側を通過したので、太陽コロナの研究を続けてきた私も“多摩六都科学館”の諸計画にヴォランティアとして動き回りました。当日は曇りでしたが、幸運にも雲の合間から三日月状の部分日食を眺めることができ、集まった約2000人の子供連れの方々も、計画された科学館としても大満足だったと推察します。次に日本列島を横断する皆既日食は、26年後の2035年9月2日ですので、皆様方どうぞ長生きして素晴らしい天体ショーを眺めて感動して下さい。8月には「太陽とあそぼう」という特別イベントが開催され、私が過去に行った皆既日食観測や、現在活躍中の太陽観測衛星「ひので」による太陽研究の成果の一部を解説する役目を担いました。この「ひので」は私の東大在任中の教え子達がやってくれたものです。

私が女学院大学に学長として在任中に大学院修士課程や博士課程を設置し、特に博士課程完成年次に三名の文学博士を出すことができ、毎年数名の博士号授与者があることは、現在の先生方の努力と感謝していますが、昨



年度は定員六名を満たす授与者があるというので、三月にゲーンズ・チャペルで行われた学位授与式に出席しました。しかもその中の一名は私が女学院大学に教授として赴任した年に一年生に入学し、私の講義を聴いて下さった方だったので、大学院設置の成果を深く味わう事ができ、大きな喜びを噛みしめました。

女学院を退職して東京女子大学に関係することになり、既設の修士課程の上に新しく博士課程の設置を行い、完成年次に三名の博士号授与者があり、昨年度には二名の授与者があったのですが、そのうち一名が男性ということは女学院の場合と全く同様だったので、喜びに加えて驚きでした。

一般に教育・研究には長時間が必要と知っていても、東大、広島女学院、東京女子大学での仕事の成果を眺めることができ、大変満足している昨今なのです。

報告

関東ブロック主催

2009 夏雲の集い

～ 原爆死没者追悼礼拝 ～

今年で22回目となる関東ブロック主催 原爆死没者追悼礼拝「夏雲の集い」は、去る7月10日（金）、東京支部宗教委員 藤井幸子さんのご主人の藤井哲夫牧師が奉仕をなさっている日本アライアンス教団東京キリスト教会をお借りして開くことができました。



J R 中央線武蔵小金井駅からバスで5分ほどの東京キリスト教会は、かわいくてきれいな教会で、牧師ご夫妻と教会員の方々が温かく迎えて下さいました。当日は梅雨の最中にもかかわらず過ごしやすいお天気でしたし、参加者はちょうど礼拝堂いっぱいの40名で、神様の祝福を感じました。

今井典子埼玉支部長の奏楽で始まった追悼礼拝では、藤井牧師から「剣を打ち直して鋤に」（イザヤ書2章4～5節より）という題で説教

をいただき、平和への思いを新たにしました。

第二部ではビデオ「夏雲」を上映しました。その映像には、東京教会の教会員の方々も強いショックと感銘を受けられたようです。

その後の茶話会では、今回もご出席下さった元院長の西恵三先生からお話をいただきました。天文学がご専門の先生ですから、26年後の皆既日食が関東地方でも見られること、また、今年宇宙飛行士訓練生となった油井亀美也さんは防衛大学校での教え子であることなど、楽しくお話し下さいました。ご寄稿いただいた巻頭言も合わせてご覧下さい。

64年前と26年後、合わせて90年もの年月に思いを馳せた一日でしたが、今回初めて参加された方もあり、有意義な夏雲の集いとなりました。来年は千葉で集いを持つ予定です。



～ 夏雲の集いの際に、同窓生の桜岡さんからご紹介いただきました ～

元広島教会牧師 四竈一郎牧師ご一家の手記



平和を実現する力 長女の死をめぐる被爆牧師一家の証言

四竈 揚 編

日本キリスト教団出版局

¥1,890

「その地獄絵を見たもの、更にその後の不安と苦しみを体験したものでなければあのすさまじさは伝ええないことであると思うと、つたない言葉であっても何とかしてその一端を告げなければならないと思うに至った。」

— 四竈 揚（まえがきより） —

ひろしま通

つう

白井京子（現・瀧口）高23、文英5

以前、この項でも紹介したことがあるが、広島に関する歴史や観光、食べ物など全般に関する問題百問の試験を九十分で解答し、七十問以上の正解で「ひろしま通」として認定される。今年二月に第三回が、初めて東京で行われ、私も受験し、このたび合格通知をいただいた。これまでに千九百五名のひろしま通が誕生しているようだ。東京在住「ひろしま通」として何かお役に立ちたい。

松山善三さんが演出し、テレビで放送した番組を文章にまとめられ、「碑」と題して出版された。広島二中の一年生が八月六日の朝、建物疎開の作業のため、元安川の川岸に八時に集合し、原爆を受け、学年全員が亡くなってしまうという事実を、親や先生達に取材して、被爆後も数日生きていて、親に会うことのできた子供たちのことなど詳しく書かれたものである。うちの娘の中学の国語の教科書にも載っていた。以前よりこれを朗読し、私も被爆二世として父の被爆体験のことなど、八月六日のこともよく知らない東京の子供たちに話をしたいと思っていたので、昨年娘が中学二年の時、担任の先生にお話ししたところ、偶然にもご両親が、長崎での被爆者であることがわかり、話がトントン拍子に決まり、娘たちの学年と一つ下の中学一年生（碑の子供たちと同じ年）に授業の時間にお話をさせていただいた。三百二十二人の顔写真の載った中国新聞を黒板に貼り、みんなと同じ年の子供たちが原爆の犠牲になったのだと話したところ、本当に真剣に聞いてくれて、素晴らしい感想文も全員が送ってきてくれた。今年も一学期の最後に、また時間をいただいた。「碑」を朗読する予定である。

ところで、昨年半年間、中国新聞で、音楽評論家であり作家である田家秀樹氏により「広島フオーク村」という小説が連載された。四〇年前の広島若者たちの事、なぜ広島フオーク村が生まれたのか、なぜ吉田拓郎という一人の広島商大生がデビューし、これほどのビッグアーティストになったのか、など度重なる取材により、詳しく、ほとんど実名に近い名前で誰だか特定できるような書いてあり、大変興味深く読ませていただいた。最終回には、

「元フオーク村のメンバーの一人、白川京子は、現在、東京でアナウンサーをしている」と記述され、嬉しく保存している。

頬の傷治らず猫の恋終わる 白井薔薇

読みかけの葉の失せて猫の恋 薔薇

行く春を一弦琴の音で送り 薔薇

福島県郡山の三春滝桜を訪ねられた清水敬子さんから投句をいただきました。

濡れしだれ畏敬さ漂う滝桜 清水敬子

投函し待つときめきや春うらら 敬子

樹齡千年を超す滝桜はよきエネルギーを発し、佇まいも凄まじき様子で、斜面に空洞化した幹を抱え枝を広げ、かれんな花びらを無数に付け、たった一人でたたずむ様は思わず手を合わせずにはいられませんでした。

銀座便り・・・いつも東京支部の役員会は銀座教会の会議室をお借りしている。このところ、行くたびに新しいビルができたり、周りの様子が変わっている。いつも車で通っていた道がある日突然、逆方向の一方通行に変わっていて驚いたこともあった。

友人の息子（山下 九）さんがシェフを務める「ア・ヒル」では、月一回料理教室を開いているが、参加者は説明を聴き、見ているだけでよい。料理のレシピを貰い、コツなどを聞いて、フルコースをいただいで六千円。好評のようだ。ぜひいかがでしょうか？（TEL 03・5766・2020）

白井薔薇

しらいそうび

俳句結社「童子」同人、日本伝統俳句協会会員
テレビ東京「サブちゃん」と歌仲間」に出演中



女学院の思い出

川越 厚 (クリニック川越・院長)



学院卒業生が女学院の思い出を語るのも変な話であるが、女学院応援団の一人として表題について語ることをお許しいただきたい。

今だから明かすが、

僕は母校の校歌よりも女学院の校歌の方を早く覚えていたし、女学院の門戸が男の子に解放されていないことを知って激怒し、やむをえず学院に入学したのだ。学院生は清心的女子生徒と仲が良いという風評は、僕にとって大変迷惑な話である。

僕が女学院の表舞台にデビューしたのは、創立70周年の記念行事の中であったことは前回述べたとおりである。当時僕は10歳。かわいい少年であったという説もあるが、ませていたことも事実。とにかく子供心にも女学院はあこがれの的であった。

母 静枝は長年短大の方で教鞭をとっていたし、姉二人は女学院中高を卒業し、特に長女の翠は英文科を卒業している。その関係で牛田にあった我が家には姉の友人だけではなく、宣教師の人たちもよく遊びに来ていた。母は1933年(昭和8年)から1年半、ニューヨークのコロンビア大学で公衆衛生看護学を学んだという経験があり、父 研三は米軍岩国基地で通訳として働いていたので、二人とも英語はきわめて流暢。宣教師の方々との会話は、僕にとっていつも驚きであり自慢だった。たくさんの宣教師が呉の東鹿田や牛田のわが家によく遊びにきていたが、残念ながら彼女たちの名

前をすべて覚えているわけではない。

50年前の記憶に残っているのは、すぐ上の姉睦を可愛がっていらしたストループ先生。来日して間もない彼女がバスに乗った時、車掌に「…でころしてください」と言ったという話はあまりにも有名で、彼女のことは我が家でもしばしば話題になった。ウィリアムズ先生は綺麗な人形のような方であったが、ニッコリ笑ってウインクされてもなにせ僕はまだ本当の子供、戸惑ったことを覚えている。スウェーデン人のソニア・ヘッドランド先生はなぜか非常に僕を可愛がってくださり、彼女が運転するスクータに乗せてもらって市内をよく走りまわった。甘く懐かしい思い出である。

僕の一つ(2つ?)年上で、我が家(祇園)の近くに住んでいた木村さんというアメリカ帰りの元気な女学院生がいた。彼女には非常に仲のよいTwinの宣教師(名前は忘れた)がおり、ある夏、彼女たちと一緒に日本海へ泊まりがけのキャンプに行ったことがある。若い米国女性の天真爛漫で明るい振る舞いに、さすがの東大生もたじたじであった。彼女たちと恋愛の話をしていて、非常におもしろい経験をした。

当時浅丘るり子の「愛の化石」という歌がはやっていたが、その中に「愛するって耐えることなのね」という彼女のモノログがある。それを僕が適当に英訳して“To love is to endure”と主張すると、彼女たちは猛然と反論してきた。「なぜ、愛が耐えなければならないのか」と。一人でも大変なのに、二人のヤンキー娘が、しかもTwinの姉妹がまくしたてるのである。迫力が違う。ところがうまいことに、早口でまくしたてる言葉の意味

がよくわからない。この時ほど自分に英語力がないことを感謝したことはない。ただ日本男児として、彼女たちの迫力に負け、「聖書にも」愛はすべてを忍び・・・“(コリントの信徒への手紙 13:7)と書いてあるではないか」と、反論できなかった自分がふがない。

冗談はさておき、僕たちの学院にもたくさん外人の神父さんがいた。学院も女学院も、宣教師の先生方はみな素晴らしい方だったと思う。特に女学院のハートマン先生には、古き良き時代の米国レディの香りをいつも感じていた。彼女がリタイアして帰国されて数年経った頃、僕は学会で訪米したことがある。その際、先生はボストンのプルデンシャルタワーまでバスを乗り継いで会いにいらした。夕食を共にしながら旧交を温めたわけであるが、大変お元気でいらした。今も懐かしい。

詳しいことはよく知らないが、女学院と川越家の関係は戦前からあったようである。私の祖母が女学院中高に近い鉄砲町で旅館を経営していたことや、米国帰りの母が福島町の愛光園（現社会館）に勤めていたこと、父が将校として女学院に配属されていたこと、被爆した女学院職員の中に僕の叔父の許嫁がいたことなど、僕がよく知らない所で女学院と川越家とは深くつながっていたようである。父が被爆したのは、女学院の校舎の中。朝礼が始まる前に、音楽室でピアノを弾いていた時とのことである。アップライト式のピアノだったので、幸い父は無傷。瞬時にして倒壊した校舎を脱出することができた。その後の悲惨な状況について、父は多くを語らなかった。

皆様にはなじみが薄い言葉と思うが、いま僕は在宅ホスピスケアという新しい医療の分野を歩んでいる。一言でいえば、患者の家でホスピスケアを提供するということになる。御承知かも知れないが、日野原重明先生はホスピスケアの分野でもわが国のパイオニアである。これはその日野原先生についての話である。

今から10数年前、ある講演会が終わって初めて先生にお会いしたことがある。初対面であったので自己紹介しようと思って、「広島出身の川越です」と言ったら、先生は「君のことはよく知っているよ。お母さんはどうしている？確か女学院を退官されてこちらに来ているのでしょうか。そういえば君の奥様の松坂さんも聖ルカの卒業生で女学院に勤めていたね・・・」と矢継ぎ早に僕のことだけではなく、母や妻のことををも詳しく話し始められた。少々のことでは驚かない僕も、これには度肝を抜かれた。当時すでに90歳に近いお年であつたと思う。先生はその後文化勲章を受賞され、100歳近くになった今も50年先の医療を論じていらっしゃる。やはり違いますね。

その日野原先生のお父様である日野原善明先生が、私の父母の結婚式で司式をなさった。当時、先生は女学院の院長、重明先生は京大の医学生であつたと思うが、僕がまだ小さい時から父母はよく先生の話をしていた。不思議な縁を感じている。

<プロフィール>

1947年 山口県山口市生まれ。

1966年 私立広島学院高校卒業。

1973年 東京大学医学部卒業。

茨城県立中央病院産婦人科医長、東京大学講師、白十字診療所在宅ホスピス部長を経て、1994年より6年間、賛育会病院長を務め、退職。

2000年6月、自らのクリニックを開業すると同時に、在宅ケア支援グループ・パリアンを設立。

趣味はクラシック音楽鑑賞、旅行、将棋、釣、スポーツ(野球・テニス・卓球)。

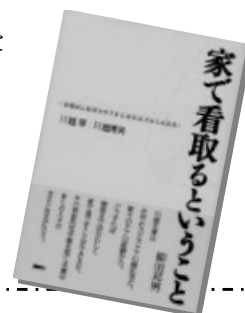
著書は「家で死にたい - 家族と

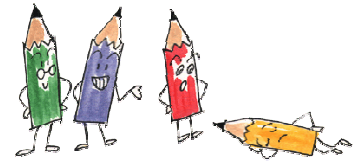
看とったガン患者の記録」

(保健同人社)、

「家で看取るとのこと」

(講談社)など。





ヒロシマからのメッセージ

土屋 時子 (山口、高19・文日1)



私は、4月に開催された2009年度広島女学院大学同窓会ホームカミングデーで、学生達と語り続けている広島女学院原爆被災・朗読構成「夏雲は忘れない」を上演させていただき、こ

のことがきっかけで、「同窓生の輪」に寄稿させていただきましたこととなりました。

私と同期生に松永幸枝(旧姓木本)さんがおられ、二人とも女学院中学校から数えると実に48年間(人生の大半)も女学院でお世話になり、3月末に無事定年退職となりました。思い起こせば48年の間で一番悲しい出来事としては夫の病死がありましたが、図書館司書という大好きな仕事を与えられ、子供を抱えて働きながらもお芝居や朗読、音楽活動など続けることができたのは、周囲の人たちの支えがあったからこそで、真に幸せな人生だと思っています。せっかく与えていただいた機会なので、広島からのメッセージとして、この「夏雲は忘れない」と私のライフワークとしての演劇活動について、少し書かせていただこうと思います。

女学院大学日本文学科の第一期生として入学した私は、演劇部に入りました。あまり真面目な部員ではありませんでしたが、初舞台の「森は生きている」では、他大学の学生達と何日もかけて舞台装置を作り、やっと森に雪が降った時の感激は今も忘れることができません。その後大学紛争の時代となり、私も「演劇より世界を変革することが大事!」と信じ

て演劇から遠ざかりました。25歳の時「河」という峠三吉と仲間たちの青春像を描いた舞台を観て、再び芝居の世界に入り、以後数えきれない舞台に出演させていただきました。中国残留孤児のひとり芝居「花いちもんめ」は、1996年の初演以来広島県内外や沖縄でも公演を重ね、2月には退職記念(?)で、女学院大学と中学校で学生達にも観てもらいました。9月は廿日市高校と県立図書館、11月には広島県立大学でも公演を依頼されています。この芝居は、依頼がある限り、足腰が立つ限り、続けていく覚悟です。

「夏雲は忘れない」の初演は2003年7月、第37回原爆講座プログラムで、大学の講堂に学生・教職員そして市民500名以上が集まり涙を流されました。女学院は2006年に谷本清平和賞を受賞しましたが、その受賞式会場でも披露し、ヒロシマ8.6の国際平和会議や井口小学校、幟町小学校等、数えきれない場所で再演させていただきました。

一番苦勞することは、学生達がアルバイト等で忙しすぎて全員の稽古ができないことと、卒業等で学生が入れ替わること。でも就職後もずーっと参加し



ひとり芝居「花いちもんめ」

てくれる卒業生がいて、私自身、娘のような学生達と一緒に朗読できるのが何よりも楽しみなので、やはり足腰の立つ間は頑張ってみようと思っていますところ。



朗読劇「夏雲は忘れない」

「夏雲」の写真や情報などが見られますので、のぞいてみてください。

<http://www.chugoku-np.co.jp/Graph/angle/030715/030715.html>
 (“ちゅうごく路 あの日忘れない”で検索)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/bngkkn>
 (“広島文学館”で検索)

「栗原貞子平和祈念文庫開設記念 生ましめんな」
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/4117>
 (“harp/4117”で検索)



- 創作劇「ばらっく」で ちんどん屋の母子を描いたことから 10年前に「広島ちんどん倶楽部」を結成。イベントへの出演は年に30回。十数人に増えたメンバーと一緒に街を盛り上げ、今の平和を謳歌する。
- 栗原貞子さんの遺族から蔵書を譲り受け 2008 年秋に大学の図書館内に「栗原貞子平和記念文庫」を創設。
 (中国新聞 2008 年 10 月 25 日号より)

高校25期卒業生 第13回同期会を井の頭公園に接した素敵なレストラン英葉亭で行いました。

二階の広いお部屋を貸し切ってフランス料理のフルコースを堪能できたと思います。

今回は、昨年秋に呉から東京に居を構えられた吉永(中島)史恵さんが参加されて、11人で和気あいあいと楽しく過ごし、新緑のきれいな井の頭公園を通過、二次会の和風喫茶店の花仙堂でさらに話はずみしました。これからも同期会が続きますよう幹事一同願っています。

幹事 田中千代子(一木)、西野雪野(佐藤)、野尻澄枝(服部)

同期会 高校25期

毎回の記録と写真が一冊のノートに綴じられていきます。細々とですが、毎年会を重ねるごとに、新しい参加者があったり、娘が結婚した、孫が生まれたなどのニュースを聞くことができます。これからも、持ち回りで続けていきたいと思います。

藤居阿紀子(森)



クリスマス会のお知らせ

2009 年 12 月 11 日 (金) 午後 2 時 ~

日本基督教団 銀座教会 大礼拝堂 (東京都中央区銀座 4-2-1)

- JR「有楽町駅」中央口下車 徒歩5分
- 地下鉄「銀座駅」下車 C6 または C8 出口よりすぐ
- 「銀座一丁目駅」(有楽町線)下車 4 出口より徒歩 2 分

クリスマス礼拝 説教 長山信夫牧師 (銀座教会)

草間美也子 パイプオルガン コンサート (銀座教会音楽主任)

田中晶子 ヴァイオリン コンサート (1990 年中学卒、N 響団員)

今年は恒例のパイプオルガンに加え、
同窓生の田中晶子さんにヴァイオリン演奏をお願いしました。
昨年8月の「秦知子先生記念コンサート」で演奏していただきましたが、
素晴らしい音色があの大礼拝堂に響き渡ります。
是非、お友達とお誘いあわせの上、お出かけください。

プログラム : J.S.バッハ作曲 無伴奏パルティータ第2番ニ短調



- ♪ 恒例の役員手作りのお菓子のプレゼントもお楽しみに。
- ♪ 申込みは不要です。他支部の方もぜひお誘いください。



■神奈川支部クリスマス会

12/3(木)11:30~ アルテリーベ横浜本店、
欧風ランチとピアノ三重奏、参加費 5000 円、
申込み : TEL/FAX 045-821-432(梶川さん)

■千葉支部クリスマス会

12/7(月)10:30~ 新津田沼教会
問合せ : TEL/FAX 043-266-3342(村中さん)



同窓会のホームページが新しくなりました!

とても美しく見やすいホームページです。

同窓生の繋がりを深めましょう。

「広島女学院同窓会」で検索できます。

<http://www.hjgaines.com/>

敬老の日

に因んで
75歳以上の方々にお祝いの
カードをお送りしました。



<会費納入>

東京支部年会費の納入に ゆうちょ銀行口座
からの自動振替払いの導入を検討しておりま
したが、自動振替払いの条件を満たさないた
め、現時点では難しいと判断し、当面導入を
保留します。会費は来年度も振替用紙で納入
をお願いいたします。

80歳以上の皆さまへ

東京支部では80歳以上の同窓生を終身会員
とし、来年度より会費をいただかないことに
しました。長い間、会費納入にご協力ありが
とうございました。